

Title	幼少年時代のネフスキー
Author(s)	生田, 美智子
Citation	大阪外国語大学論集. 26 p.23-p.39
Issue Date	2002-03-22
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79874
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

幼少年時代のネフスキー

生 田 美智子

Детство и отрочество Н.А. Невского

ИКУТА Митико

はじめに

今年はネフスキーの生誕110周年にあたる。彼がフォークロアを収集した宮古島の比良市では市制55周年にあたり、ネフスキーの顕彰碑の除幕式が2002年3月7日に行われる。ネフスキーの娘であるエレナ、曾孫のヤーナ、ネフスキーの小伝を書いたクイチャーノフが招待されるという。また、某テレビ局ではネフスキーのドキュメンタリーフィルムの企画がもちあがっており、筆者のところにも東京から取材の人が来阪した。さらに、2002年9月26-27日には彼が少年時代を過ごしたレイピンスクでネフスキー生誕110周年記念国際会議が開催され、筆者も報告を依頼されている。この様に、日本でもロシアでもネフスキー研究の機運が盛り上がっている今、改めて彼の生涯の原点を見つめることはあながち意味のないことではないだろう。

従来、ネフスキーはスターリンの粛清の文脈で語られることが多かった。彼の生涯の軌跡の原点にはほとんど注意が払われなかった。それとも関連するが、ネフスキーは、西夏学者として知られる。死者には与えないという慣例を破って、1962年レーニン賞を受賞したのは、『西夏文献学』（1960年刊行）に対してであった。西夏研究が脚光をあびた分、彼が日本学者であったことは忘れ去られてしまった観がある。たしかに、ネフスキーは西夏、いや、それだけでなく、アイヌ、宮古、曹（台湾の少数民族）などを研究した。しかし、学生時代から晩年にいたるまで一貫して取り組んできたのは、日本学である。死の直前にも西夏学と並んで、『露日辞典』の作成、近松門左衛門の翻訳、日本漂流民ゴンザの日本語、日本語歴史音声学を研究していた。

ネフスキーは日本学者として日露文化交流に位置づけた時、その全体像が見えてくる。ネフスキーの全体像、彼をとりまく日露の国際関係を浮き彫りにする第一歩として、いつ頃、何を契機として東洋学、日本学を志したのか、日本学者ネフスキーとしての素質はどのような環境で醸成されたのかを見てみよう。それには、まず、彼の幼少年時代を探る必要がある。

本論は、彼が幼年時代を過ごしたヤロスラヴリ、少年時代を過ごしたルイピンスクのアルヒーフでの調査をもとにしたものである。

1 ヤロスラヴリ

周知のように、ネフスキーが生まれたのはヤロスラヴリである。ヤロスラヴリはヴォルガ沿岸で最古の町である。何世紀にもわたる歴史は、1010年ヤロスラフ賢公がヴォルガ川とコトロスリ川の合流するところにヴォルガ上流の要塞を創建したことに始まるといわれる。伝説によれば、この場で賢公は手斧で大熊を殺し、自分の名前をその町につけるように命じたという。この伝説はヤロスラヴリ市の紋章（斧をかついだ熊）に反映されている⁽¹⁾。現在では「黄金の環」（モスクワからヴォルガにいたるまでの範囲に環状に点在するロシア中世の古都）のハイライトとしてツーリズムで有名で、観光名所のスパソ・プレオブラジェンスキー修道院（1516年再建）が歴史の重みを伝えている。ヤロスラヴリが最初に文献に登場するのは、『原初年代記』、1071年の条においてである。ちなみにモスクワが歴史に登場するのは、1147年のことである。「モスクワの兄」といわれるヤロスラヴリはルーシの北東の前衛としてロシア国家の形成に大きな役割を演じた⁽²⁾。

1218年にヤロスラヴリ公国の首都になり、文化の中心として名をはせる。ここにルーシで最初の神学校ができる。1238年にはモンゴルの侵略をうけ、その支配下に入る。ロシアがモンゴルをはじめて破ったクリコヴォの戦い（1380年）では、ヤロスラヴリから多くの兵士が参戦している。イワン三世が全ロシアの支配権を握るにともない、1463年にモスクワ大公国に併合される。

17世紀にはヤロスラヴリは商取引（小麦、亜麻、魚がヤロスラヴリを経て陸路でモスクワからアルハンゲリリスクへ運ばれた）や手工業（なめし皮工場、亜麻工場）の中心であった。1722年にはピョートル大帝の命令でヤロスラヴリ大マニユファクチュアが建設される。18世紀には町は巨大な工業都市になった⁽³⁾。

一方、文化面でも1750年には、ロシアで最初の地方劇場が俳優Ф.Г.ヴォルコフにより建設され、1795年にはスパソ・プレオブラジェンスキー修道院で『イーゴリ軍記』の写本が発見されるなど、注目をあびている。1805年には、ネフスキーの父親が卒業した名門デミドフスキー法律リツェイが建てられている。1870－98年にはヤロスラヴリは鉄道によりモスクワ、ヴォログダ、コストロマ、ペテルブルグと結ばれた⁽⁴⁾。

ネフスキーは以上のような古都に生を受け、ここで幼年時代を過ごすことになる。

2 祖父のこと、父のこと

ネフスキーのことを述べる前に、彼が生まれ育った家庭環境を知るために、祖父や父のことを見ておこう。ヤロスラヴリとペテルブルグのアルヒーフ史料をもとに彼らの経歴を再現したい。

祖父のアレクサンドル・アレクサンドロヴィチ・ネフスキーはヤロスラヴリ県ヤロスラヴリ郡クラスノセリスカヤ郷の生まれで、ヤロスラヴリに住む正教徒だった。神学校出身で、主な仕事は郡会の弁護士であった。

祖母のエリザヴェータ・ペトロヴナ・ネフスカヤはヤロスラヴリ県リュビムスキー郡ボゴロツコエ村で生まれた。教育は受けていない。専業主婦であった⁽⁹⁾。

ネフスキーの娘ネリ（エレナの愛称）が所蔵する文書によれば、ネフスキーの祖父が子供たちと住んでいたのは、ヤロスラヴリ市ヴォズドヴィジェンスカヤ通り5号館だという。1855年6月21日祖父母に長男のウラジーミルが生まれるが、1855年9月1日には夭折している。当時祖父は市裁判所書記であった。

1856年10月6日、祖父母に次男のニコライが生まれるが、翌年に1月29日に亡くなっている。当時祖父は市裁判所14等官であった。

1858年、祖父は12等官に昇進する。同年10月11日に長女のエリザヴェータが生まれるが、またも1860年10月7日に亡くなっている。

1861年7月18日に三男のドミトリが生まれた。この頃から子供たちが順調に育つようになる。1863年10月23日に四男のアレクサンドル、すなわち、コーリャ（ネフスキー）の父親が生まれている。さらに1866年7月9日には、五男のミハイルが、1870年6月26日には次女のマリヤが生まれている⁽¹⁰⁾。

父の兄ドミトリは成人してデミドフスキー法律リツェイの司書になり、1886年、25歳で、有名な市会議員で郷土史家、ジャーナリストのゴロフシコフの娘ニーナ・コンスタンチノヴナ、21歳と結婚している⁽¹¹⁾。当時デミドフスキー法律リツェイの学生だったアレクサンドル（ネフスキーの父親）が保証人になっている。花嫁の父ゴロフシコフは7等官で、『ヤロスラヴリ県 歴史・民俗学的オーチェルク』（1888年）、『ヤロスラヴリ県史』（1889年）、『レイビンスク市、その過去と現在』（1890年）の著者として有名な人物である。

四男のアレクサンドル、すなわち、ネフスキーの父親は、80年代にデミドフスキー法律リツェイを卒業し、法学修士の学位を取得した。正教徒だった。リツェイは、おもに貴族や雑階級の子弟のための4年制の特権的教育機関であった。名門デミドフスキー法律リツェイは、ロシア教育学の始祖といわれるウシンスキー（1824－1870年）が、モスクワ大学の法学部卒業後、1846年から1849年まで教鞭をとっていたことで知られる。

1890年10月17日、ネフスキーの父親は10等文官に任命される⁽⁸⁾。

1891年4月15日、ネフスキーの父親はヤロスラヴリ地方裁判所の判事補に任命される。単独で取り調べを行う権限はなかった⁽⁹⁾。父親の3歳年下の弟ミハイルはギムナジウムで学び、デミドフスキー法律リツェイの書記をしていた⁽¹⁰⁾。

1891年6月5日、父親は27歳でレイビンスクの司祭の娘であるエレナ・ニコラエヴナ・ソスニナと結婚している⁽¹¹⁾。

1891年6月24日から予審判事になる⁽¹²⁾。

1892年2月18日にコーリャ（ネフスキー）が誕生し、2月23日に洗礼をうけている。洗礼親は父方の祖父と母方の祖母だった⁽¹³⁾。

すべて順調にいくかに見えたが、ネフスキーが1歳にもなっていない、1893年1月9日、母親は風邪をこじらせ、あっけなく死んでしまう。28歳の若さだった⁽¹⁴⁾。市のレオンチェフ墓地に埋葬された。

1893年2月3日、父親は9等文官に任命される⁽¹⁵⁾。

1893年10月31日、父親は、母が死んで1年もたたないのに、早くも再婚する。このとき父は30歳で、裁判官上級候補生だった。継母はヤロスラヴリの商人の娘で、イライダ・フョードロヴナ・ボチャロヴァといい、26歳だった⁽¹⁶⁾。

1894年8月8日に父親と継母の間に異母妹エレナが生まれている。さらに、1896年2月10日に異母妹キラが生まれている⁽¹⁷⁾。

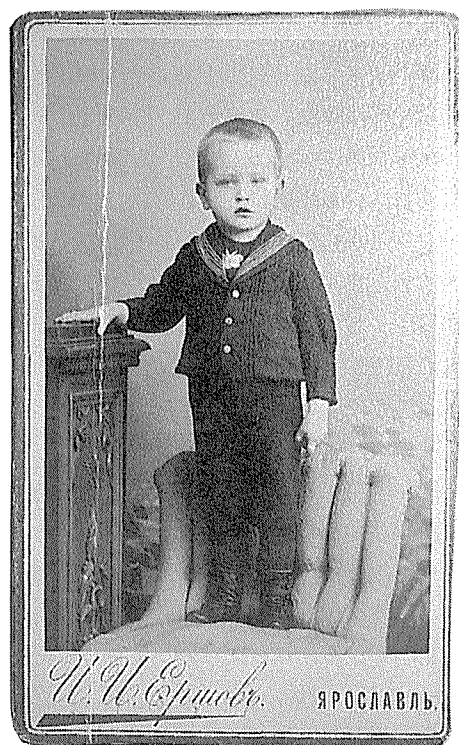
以上見てきたように、ネフスキーは町人階層のインテリ環境で育った。このままいけば、父や叔父のようにデミドフスキー法律リ

ツェイを卒業し、法律関係の仕事に携わっていたかも知れない。しかし、運命はまたもネフスキーに試練を与える。1897年1月29日、予審判事をしていた父親が急死し、ネフスキーは妹たちと別れて暮らすことになった。継母は妹たちを連れて実家に帰り、ネフスキーは母方の祖父母のいるルイピンスクへひき引き取られることになる。

ネフスキーは自分の幼年時代をどのように認識していたのか。ペテルブルグのアカデミーのアルヒーフにネフスキーの履歴書が残っているが、そこには次のように書いてある。

私はヤロスラヴリ市で1892年に町人出身の両親から生まれた。生まれて一年もたたないうちに母親が亡くなり、父親はまもなく再婚し、後妻との間に二人の娘が生まれた。父親はこのとき、小さな地方都市のボシェホニエでヤロスラヴリ地方裁判所の予審判事をしていた。1896年に父親が亡くなったが、私に一文も残さなかった⁽¹⁸⁾。

寡黙な履歴書（年のみで月日は書いていない）であるのに、「一文も残さなかった」という言わずもがなの文言が目につく。父親に対するネフスキーの屈折した思いが伝わってくる。家族調書によれば、ネフスキーの父親は1,000ルーブルの俸給を受け取っていた。ちなみに、母方の祖父ソスニンが受け取っていた年金は400ルーブルである⁽¹⁹⁾。これだけのお金で孫4人を養っていたのである。そこから判断すれば、残す意思さえあればネフスキーにある程度



ヤロスラヴリ時代のネフスキー

の遺産は残せたはずである。父親は「古い気質の人間で、酒飲みだった」⁽²⁰⁾ という。

ネフスキーの履歴書に記された父親の没年とネフスキーの個人調書に書かれた父親の没年⁽²¹⁾には不整合が見られる。履歴書は1896年といい、調書では1897年になっている。何年にネフスキーの父親は亡くなったのか。ネフスキーの従姉妹マリア・ドミトリエヴナ・セロヴァの証言を聞いてみよう。

私は、コーリヤが孤児になってヤロスラヴリから祖父のニコライ・アレクサンドロヴィチ・ソスニンの所へ連れてこられた5歳の時から彼を知っていた⁽²²⁾。

ネフスキーは1892年に生まれているので、5歳になっているのであれば、父親は1897年に亡くなったことになる。ネフスキーは履歴書の中で父親の没年を間違えている。単なるミスと言ってすますことのできない、屈折した思いがそこにはあるように思われる。父親との縁の薄さを埋めるかのように、彼は母親への傾倒を見せる。成人してからの実生活における女性志向だけでなく、フォークロアを収集する時のような学問的レベルにおいても女性バイアスがかかることになる。

3 ルイビンスク

コーリヤが引き取られていったルイビンスクはヤロスラヴリと同様ヴォルガ河畔にある。彼は物心ついてから大学に入るまでルイビンスクで少年時代を過ごすことになる。

「母なる川ヴォルガ」。こうロシアの人々はヴォルガに対する感情を表現する。ヴォルガはロシアに生命を与え、数千のロシアの村、都市を育て、その運命を規定してきた。ルイビンスクはそのようなヴォルガ河畔の町の中で独特の位置を占めている。

すなわち、歴史的発展においてルイビンスクは、かつて大公や分領公の首都であったが、その後は、県の町や郡の町、あるいは村におちぶれたルーシの古都には属していない。ルイビンスクは非貴族的な出自をもつ。モスクワ大公や皇帝の台所に魚を調達し、ピョートルの時代には工業化に貢献し、エカテリーナ大女帝により都市の称号を与えられた。

ルイビンスクは『原初年代記』の1071年の条に「シェクスナ河口」として出てくる。ここからルイビンスクの歴史は1071年を出発点とされる。石の多い土壌は牧畜や農業には適していない。1137年にはリュバニスク、1504年にはリュプナヤ・スロボダといわれた。魚（レイバ）に由来する名称からわかるように、漁村で大公や皇帝の食卓に魚を用達した。宮廷おかかえの漁師はヴォルガ、シェクスナ、モログで「赤い魚（チョウザメ類などの上等の魚）」を釣る許可書をえた。許可書のない漁師は、生きるために何か他の稼業に従事しなければならなかった。これが後の都市の定住地としての村の発展を決定づけた。17世紀後半村には二つの交易市場があった。一つは常設の商売のための売店や店があるもので、他は定期市のためである。このようにして徐々に宮廷の漁村は商村になっていった⁽²³⁾。

ヴィシネヴォロツカヤ水系（1709年）、マリインスカヤ水系（1808年）、チフヴィンスカヤ

水系（1811年）ができてから、ルイビンスクは商業の中心地、船舶の積み替え地として発達した。1778年からルイビンスクといわれる。ルイビンスクはヴォルガ上流のもっとも巨大な商業の中心地である。ここには10万人の曳舟人夫や荷役労働者が集まった。19世紀後半から工業が急発達し、製粉企業、造船企業、ロープ工場が現れた。1871年には鉄道がルイビンスクとバルチック沿岸地方やペテルブルグを結んだ⁽²⁴⁾。

1897年の全ロシア国勢調査によると、ルイビンスクには25,290人の人口があり、3,093の建物があり、そのうち862が石造だった。町にはロシアの巨大な銀行の支店があった。ルイビンスクは、国家銀行以外に、ロシアの五つの商業銀行の支店がある数少ない地方都市のひとつで、ヴォルガ・カマ銀行、ロシア・アジア銀行、外国貿易ロシア銀行、シベリア商業銀行、ペテルブルグ国際銀行があった⁽²⁵⁾。

4 祖父ソスニンのこと

ルイビンスクのスパソ・プレオブラジェンスキー大聖堂の司祭である祖父はこの寺院のそばにある石造の三階建ての家に住んでいた。ここで、窓が大聖堂広場に面している下の階の部屋でコーリャの少年時代は過ぎたという。

ルイビンスクの教会のうちもっともすばらしいのはスパソ・プレオブラジェンスキー大聖堂である。これは17世紀の同名の教会のあった所に1835－1851年に建設された。新しいスパソ・プレオブラジェンスキー大聖堂は建築芸術アカデミーの総長であるメリニコフの設計で建てられた⁽²⁶⁾。

ソスニン一家はルイビンスクのクレストヴァヤ通り、スパソ・プレオブラジェンスキー大聖堂の聖職者の家に住んでいた（6号館）。

『ヤロスラヴリ県ルイビンスク市スパソ・プレオブラジェンスキー大聖堂公報』とヤロスラヴリのアルヒーフの文書をもとに祖父ソスニンの経歴を再現してみる。

祖父のニコライ・アレクサンドロヴィチ・ソスニンはヤロスラヴリ県モロガ郡で司祭の息子として生をうけた⁽²⁷⁾。生年月日は明記されていないが、1825年と推察される。

1846年にヤロスラヴリの神学校を卒業。1847年にウグリチの神学校の教師としてウグリチに赴任、1848年から同校の生徒監補佐になり、1850年にヤロスラヴリのニコルブレンスカヤ教会の司祭になり、1853年に、下級聖職者（副補祭、堂守など）学級の教師に任命されている。1856年には、ヤロスラヴリ神学校の教師に就任している⁽²⁸⁾。

1857年、曾祖母のアンナ・ヴァシリエヴナ・ソスニナが水腫で死亡。55歳だった⁽²⁹⁾。1858年にルイビンスク大聖堂に転出⁽³⁰⁾。

1859年、大聖堂の囑託司祭であった曾祖父のアレクサンドル・ペトロヴィチ・ソスニンが水腫のため死亡。60歳だった⁽³¹⁾。1861年、祖父は勤勉に対し股衣（司祭が祭服の右側の腰につるす長方形の金襴の布）を授与されている。1862年、訓戒者を拝命。1864年、黒いピロードの修道帽を拝受。1865－1872年、ルイビンスク第三教区学校の神学教師をしていた。1866年、15年間の勤勉に対し、紫の修道帽を拝受。1867年、治安判事の懺悔僧に任ぜられる。1869

年、神学教師としての献身的な仕事ぶりに対しカミラフカ（正教の司祭が賞賜される円筒形で上部がやや広く平らなピロートの帽子）を拝受⁽³²⁾。

1871年、コレラ流行時の司祭の仕事に対し、祭司長の祝福を受けている。

1875年、司祭としての勤勉に対し胸にかけける十字架を拝受。1881年、35年におよぶ司祭の仕事に対し三等アンナ勲章を授与される。1882年、任命により、22の教理問答をする。1883年7月19日から1893年8月1日までルイビンスク女子ギムナジウムの神学教師をする。1884年、ルイビンスク聖職者の聴聞僧に任命される。1887年、神学教師としての仕事に対し二等アンナ勲章を拝受。1888年、30年におよぶ司祭としての仕事に対し教区の信徒たちから飾りのついた金の十字架を贈呈される。1893年、長司祭の位に昇進される。教育庁により女子ギムナジウムでの教職に対し400ルーブルの年金を支給される⁽³³⁾。

1899年6月21日、祖父はスパソ・プレオブラジェンスキー大聖堂の囑託に退く⁽³⁴⁾。48年間の勤務のうち、42年間は司祭として、6年間は長司祭として勤務した。

1900年8月15日にネフスキーはルイビンスクのギムナジウムに入学している⁽³⁵⁾。

1905年7月4日、祖父のニコライ・アレクサンドロヴィチ・ソスニンが中風で死亡。80歳だった⁽³⁶⁾。

子供には、既婚のワルワーラ（夫はクリロフ）、県会医のヴァシリイ（妻はルイビンスク出身のエカテリーナ・アレクセエヴナ、子供はセルゲイ、ナタリア、エカテリーナ、エヴゲニヤ）、個人営業のドミトリ（妻はルイビンスク出身のエリザヴェータ・コンスタンチーノヴナ、子供はセルゲイ、マリヤ、コンタンチン、故エレーナすなわちネフスキーの母）がいた。

司祭として、神学教師として、ソスニンは多くの人の尊敬を集めた。また、慕われた。ネフスキーも祖父を慕っていたようで、彼は処女論文を祖父の名前で発表している。祖父は死後も孤児ネフスキーの精神に寄り添ってくれた。

祖父のところにはコーリャ・ネフスキーだけでなく、ドミトリの子供たち（マリヤ、セリョージャ、コーリャ）も引き取られていた。祖父の死後、孤児たちの面倒を一手に引き受けてくれたのは、母の姉、ワルワーラ・ニコラエヴナ・クルイロヴァだった。

コーリャはスパソ・プレオブラジェンスキー大聖堂のそばの家からムイシキン通りリハチョフ1-1の叔母の家へと引っ越す。

5 従姉妹エヴゲーニヤのこと

ネフスキーの娘エレーナは1937年に家族全員でヴァルガ上りをして、アストラハンにまで行ったことがあった。そのついでにルイビンスクに立ち寄った。ゲルツェン通り29号館には伯母のナタリアとエカテリーナが住んでいた。ネフスキーの母エレーナの兄ヴァシリイの娘たちであった。今回、ヴァシリイの写真を博物館のご好意で入手することができたので、ここに掲載する。彼は県会医をしていた。

さて、ルイビンスクの叔母たちからネリはもう一人エヴゲーニヤという伯母（ネフスキーの従姉妹）がいたことを聞かされた。エヴゲーニヤは画家だったという。当時、ネリはそれ

がどんな人かわからなかったという。

最近、ルイビンスクでは、肅清された郷土の人の記録がどしどし出版されている。その中にエヴゲーニヤがあった。「エヴゲーニヤ・ヴァシリエヴナ。1888年、ヤロスラヴリ州ルイビンスク市生まれ。ルイビンスク地方博物館の館員。ルイビンスク市ゲルツェン通り29号館に居住。1930年2月4日、逮捕、1930年3月23日刑法58条違反の判決。1989年5月3日名誉回復」⁽³⁷⁾。それだけではない。2001年、ネフスキーの調査でルイビンスクを訪れた筆者は、その市長から『ルイビンスク』と題した大きな本を贈られた。その「ルイビンスク歴史・建築・絵画博物館」の条にエヴゲーニヤのかなり詳しい記述があるのを見つけた。それを紹介しよう。

エヴゲーニヤ・ヴァシリエヴナ・ソスニナ=プツイロはルイビンスク博物館の副館長であった。博物館の基礎になったのは、国有化された周囲の邸宅のコレクションである。ペトロフスキー、ポリソグレブ、イロヴナ、ソスノヴェツ、チフヴィノ・ニコリスキーにある邸宅であった。絵画、グラフィック、彫刻、ブロンズ像、陶器、武器、家具。これらはすべて貴族のミハルコフ、ムシン=プーシキン、リハチョフが集め、代々伝えてきたものであるが、博物館の所有物となった。滅び行く文化の記念碑としての邸宅にエヴゲーニヤは関心をもった。このために彼女は自由や命を奪われることになる。

画家で、学者である彼女は邸宅文化の研究に力を入れた。外国語を自由に操り、生き生きと表現豊かに書いた。彼女が熱中しやすい、教養ある人間であることが、次の『イロヴナとその住民』からの引用を見れば分かる。「私の手にはいったアルヒーフは1806-1829年のムシン=プーシキン伯爵の私信である。勅書や卒業証書を含む全部で947点の書類である。案内状によればこのアルヒーフは未完である。ほとんどの手紙はフランス語で書かれ、しかもきれいで軽やかな言葉で書かれているので、読むと満足を感じる。当時の特徴的な言葉、カラムジンの言葉で書かれたロシア語の手紙もある。18世紀の強い刻印が押されている。古い時代の人間は書くのが好きだったし、書く能力があった、ここにわれわれの幸せがある。過ぎ去った世紀から手紙を受け取ると、どんな夕食をとっていたか、食卓の飾りつけはどんなだったか、おしゃれな人はどのような服地をもちいて装ったか、ソニヤの名の日の祝いはどのようなものであったか、花火はどのようなものだったかが分かる。このような手紙は、もうわれわれに対する贈り物としかいいようがない」⁽³⁸⁾。

エヴゲーニヤは歴史的建造物である邸宅を取り壊さず、保存しようと奔走した。彼女の試みは「反ソヴェエト的なアジテーション」とされた。1930年に彼女は逮捕される。合同国家政治保安部委員会の参事会の判決によりエヴゲーニヤ・ヴァシリエヴナはソロフキに流刑と決定される。ここで彼女の消息は途絶えている。噂によれば、彼女は途中で風邪をひいて死んだので、流刑地に辿りつかなかったという。日常生活（貴族であれ、常民であれ）に対する関心はネフスキーと共通する。エヴゲーニヤは肅清された従兄弟のネフスキーの運命を共有している。今一人のソスニナ一族の犠牲者である。

ここで、今ひとつ衝撃的な事実が明らかになった。彼女の兄、すなわちネフスキーの従兄弟セルゲイは「白軍の将校でヤロスラヴリの蜂起に参加して銃殺」⁽³⁹⁾になっていたことが判

明した。ソスニン家は三人も犠牲者を出していたのである。



ネフスキーの叔父ヴァシリイ
(前列右から3人目)



Эв. Евгеньевна - Невская.
ネフスキーの従姉妹エヴゲーニヤ

6 男子ギムナジウム

コーリャ少年は1900年に男子ギムナジウムの予科に入学、1909年に卒業するまで9年間通った。彼の精神形成に大きな影響をもった場所である。どんな所か見てみよう⁽⁴⁰⁾。

男子ギムナジウムの建物は1875年に建設された。最初は4年制の初等学校だった。その後6年生の、さらに予科をあわせもつ8年生の完全なギムナジウムになった。丁度ネフスキーが入学した年である1900年9月9日に25周年を祝っている。

生徒数は長い間200人以下であった。1884年、初等学校から中等学校に再編される。生徒数は毎年増大し、1899年は412人で教師数は18人を数えていた。

1900-1901年の年次報告書によれば、教育委員会のメンバーは次の通りである。ルイビンスクの第一ギルドの商人で名誉後見人のカラシニコフ、校長のストヴィチェック、ラテン語教師で学監のポリドロフ。

教官とその担当科目は次の通りである。キリスト教要理—ザケツキー司祭、ロシア語と地理—ロゴフスキー、ラテン語とギリシャ語—セマシコ、ラテン語とギリシャ語—サヴィノフ、ラテン語とギリシャ語と地理—ベロウソフ、ラテン語とギリシャ語と歴史—エルモロフ、数学と物理—ロザノフ、数学と物理—ダガエフ、歴史と地理—レベジェフ、ドイツ語—バイエル、フランス語—デ・セヴォ、習字と図画—ククシキン、習字—コピエフ、ロシア語と予科学級における算術—フィラトフ、ルター派のためのキリスト教要理—ニグリ、体育—ファデエフ、音楽—クラスノセリスキー。

1900-1901年の生徒総数は398人だった。各学年の配分は次の通りである。8年生—14人、

7年生—21人、6年生—31人、5年生—49人、4年生—主要学級と並設学級—60人、3年生—41人、2年生（主要学級と並設学級）—72人、1年生（主要学級と並設学級）—62人、予科学級—48人。この年コーリャ少年は予科に在学していた。

階層で見ると生徒は以下のように分けられた。貴族と官吏の子供—162人、都市の階層—170人、農村の階層—37人、僧侶—26人、外国人—3人。

地域別で見ると、ルイビンスクの住民が245人、ルイビンスクの郡が11人、他の都市のものが142人であった。

宗教では、正教が368人、カトリックが5人、ルター派が12人、ユダヤ教が13人。

学費免除になった学生の内訳は次の通りである。貧困家庭の者35人、国民教育省の勤務者と元勤務者の子供に適用されるギムナジウムの学則31条該当者46名で、計81名。

ギムナジウムには六つの奨学金があった。皇帝アレクサンドル二世奨学金、ザハルベコフ奨学金、ウフトムスキー公爵奨学金、ラマンスキー三等文官奨学金、スモレンスキー奨学金、チュメネフ奨学金。会計年度には全ての奨学金が支給された。上で列挙した前述の奨学金以外に、ルイビンスクの市民が提供した資金120ルーブリを基にした新しいステプロフ元校長記念奨学金があった。

ギムナジウムの運営費は以下のところから出た。ルイビンスク市国の金から21,085ルーブル、ヤロスラヴリの郡ゼムストヴォから6,000ルーブル、徴収した教育費から15,530ルーブリ94コペイカ。

こうした補助のおかげで生徒一人当たりの授業料は108ルーブリ26コペイカだったが、実際には40ルーブル支払えばよかった。

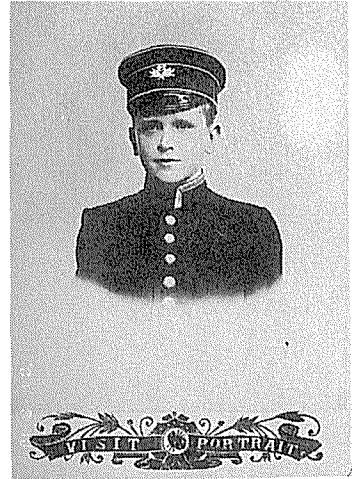
ギムナジウムの図書館を補充すべく当該会計年度に182点、計577冊、金額にして638ルーブリ6コペイカの本が入った。1900—1901年の段階で、図書館には3,655点、7,842冊の本があり、物理教室には109の器具が備え付けてあった。

当該会計年度には低学年から高学年に次のものが進級した。7年生から8年生に—21名、6年生から7年生に—30名、5年生から6年生に—44名、4年生から5年生に—52名、3年生から4年生に—35名、2年生から3年生へ—56名、1年生から2年生へ57名、予科から1年生へ—43名、合計338名が進級した。そのうち試験なしに国民教育省の通達により188名が進級した。この年全学年を終了したのが、14名、そのうち3名が金メダル、一人が銀メダルだった。

学年（1901—1902年）の初めまでに95名が新たに入学した。全生徒数は450名になり、その学年の配分は次の通りである。予科—50人、1年生（主要学級と並設学級）—78名、2年生（主要学級と並設学級）—78名、3年生（主要学級と並設学級）—60名、4年生—42名、5年生—53名、6年生—43名、7年生—25名、8年生—21名。授業料は年間40ルーブリ徴収される。コーリャはこの1年生に在籍することになった。



ネフスキーが通った男子ギムナジウム



ギムナジウムの制服姿のネフスキー

7 学生生活

ネフスキーはどのような学生生活を送ったのか。一緒に育った従姉妹のマリア・ドミトリエヴァ・セロヴァは次のように言っている。

孤児の私たちはギムナジウムを卒業するまでは一緒に暮らした。コーリャは早くから読むことを覚え、本を愛し、それを大事にした。多くの詩、寓話、民話をそらんじていた。伯母が私たちに朗読してくれるのが大好きだった。（中略）私が2年生で、弟のセリョージャが1年生だったとき、コーリャは予科に入学した。みんなよく勉強ができた。コーリャは非常な興味をもって熱心に勉強し、ひとつの教材だけに満足しなかった。余分の課題を解決し、地理や歴史の本を読んだ。宿題が手に負えない時には、泣くことも時々あった。伯母が本を手にとり宿題を読みあげると、コーリャはもう陽気になって、みんな知っていると、叫んだ⁽⁴¹⁾。

コーリャは成績がよかった。父親が遺産を残してくれなかったが、彼は下級生の家庭教師をして学費を捻出する。

コーリャが4年生のとき、彼には弟子ができた。その後この授業を彼はギムナジウム卒業まで続けた。2、3回、夏中家庭教師にでかけ、ギムナジウム受験生の勉強を手伝った⁽⁴²⁾。

われわれの感覚では大学生にもなっていない生徒が家庭教師をするなど考えられず、苦学生を連想するが、そうでもない。決して裕福ではないが、大学進学を断念し、ヴォルガの曳

舟人夫をしなければならないほどの貧乏でもなかった。コンラドも下級生の家庭教師のアルバイトをしていた⁽⁴³⁾。日本の学生アルバイトのような感覚であろうか。

すでに述べたように、1905年には一家の大黒柱だった祖父が亡くなる。日露戦争（1904－1905年）と1905年の革命。この頃、ロシアでは社会の矛盾が一気に噴出し、学生運動が激化し、社会問題になっていた。地方都市ルイビンスクにもその波紋は押し寄せた。

1905年、コーリャ少年の同級生だったラピンが自殺した。死して現存の秩序に抗議したのだ。さらに、上級生のボロドゥリィンはギムナジウムのミサの時に全学ストライキを呼びかける熱烈な演説をした⁽⁴⁴⁾。

コーリャ少年がどの程度学生運動にコミットしていたのかわからない。スパソ・プレオブラジェンスキー大聖堂の長司祭の子供にゾロタリョフ三兄弟がいる。ルイビンスクの郷土史家によれば、ネフスキーはダヴィド・ゾロタリョフ（1885－1935年、男子ギムナジウム卒業、モスクワ大学入学、学生運動に身を投じる。地理学者、民族学者、人類学者）やアレクセイ・ゾロタリョフ（1879－1950年、作家、文芸批評家、社会活動家、革命運動に参加）と交わりがあり、彼らの感化でアジア、アフリカの言語に対する関心が芽生えていたという⁽⁴⁵⁾。

1905年、伯母に引き取られたネフスキーは、スモレンスキー奨学金をうけていたが、さらに学費免除を申請し、許可されている⁽⁴⁶⁾。まだ、13歳である。伯母に厄介になり、公的な資金で自分の学生生活を維持し、アルバイトで小遣いを稼がなければならない身であれば、表立った学生運動はできなかったかも知れない。

コーリャ少年は何に興味をもっていたのだろう。彼は夏休みには、周辺の郡へアルバイトにでかけ、ギムナジウム受験生の家庭教師をした。ポシェホニエ郡にいた時のことを、従姉妹は次のように回想している。

彼はポシェホニエの郡にいたとき、約150ものチャストゥーシカを集めた。それはとても面白いチャストゥーシカだった⁽⁴⁷⁾。

150 も集めるというのはただ事ではない。後年のアイヌや宮古のフォークロアを集めたネフスキーの片鱗がうかがえる。フォークロアに対する関心はペテルブルグで出会った民族学者シテルンベルクの影響がよく指摘されるが、幼いときからフォークロアには関心があったらしい。

ちなみに、筆者は2001年夏、宮古島の人々がネフスキーをしのぶツアーでペテルブルグを訪れた時、丁度東洋学研究所のアルヒーフで仕事をしていた。ネフスキーの遺体が眠ると考えられるレヴァショフスカヤ・プスタシへ彼らと一緒に出かけた。私はレヴァショフスカヤ・プスタシは二度目の訪問であったが、そこで思いがけない光景を目にすることができた。訪問団のうちの一人は踊りの師匠であったが、宮古の民族衣装に着替え、墓場で民族舞踊を踊りはじめた。訪問団全員が踊りにあわせて宮古の歌をうたった。「故人の霊をなぐさめる歌ですか」と筆者が質問すると、ネフスキーが収集した歌だという答えが返ってきた。ネフスキーが記録してくれたおかげで古い歌が今に残っているという。

コーリャには大人の友達が多かったという。そんな一人に司祭のアレクサンドル・オブラスツォフがいた。

大聖堂の中庭には司祭のアレクサンドル・オブラスツォフが住んでいた。オブラスツォフは物理学に夢中になっていた。彼の部屋はまごうかたなき実験室であった。彼はそこで実験をし、器具をつくった。コーリャは何時間も彼のところで過ごした。幼いころコーリャは永久機関を発明することに熱望し、そのためにありとあらゆる拾得物、古い時計、ねじ、ナット、車輪、針金を集め、待ちきれない思いで何かを作った。・・・彼はあらゆることに興味をもち、いつも「なぜ」「どうして」という質問を連発していた⁽⁴⁸⁾。

コーリャ少年は文学少年でもあった。

記念日には家で文学の夕べを開いた。子供たち自身がプーシキン、ゴーゴリ、ジュコフスキーの好きな作品を選び、家族を前にして朗読した。ギムナジウムで記念日に生徒の夕べが催されると、コーリャはいつも出演した。彼は見事にゴーゴリの「トロイカ」や「人生」の場面を朗読した。彼はダンスも好きだった、芝居、文字謎遊びやさまざまな遊びをした⁽⁴⁹⁾。

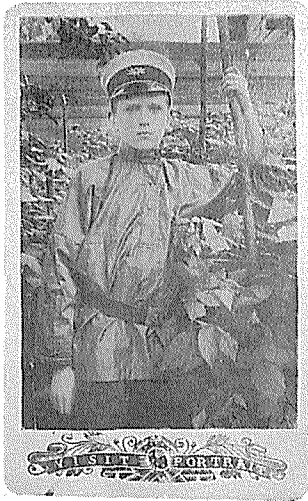
さらに、コーリャは多彩な関心を示す。

私たち全員旅行が大好きだった。コーリャはあるとき、自分のお金をはたいてカメラを購入、写真をはじめた⁽⁵⁰⁾。

とりわけ、語学が好きだった。

語学の勉強が好きだった。翻訳をし、タタール語を勉強した。彼には知り合いのタタール人がいて、コーリャは彼のもとに会話の勉強に通った。コーリャには3歳年上の友人であるワーニャ・スロノフがいた。ワーニャはすでにモスクワの東洋語学部のアラブ・ペルシャ語科で勉強していた。コーリャは、これらの言語に関心をもち、そのイロハを習った⁽⁵¹⁾。

ラテン語は予習をしないで授業にのぞむこともあり⁽⁵²⁾、成績が4だったので、語学一般というより東洋語に関心をもっていたのかもしれない。従姉妹のマリアの回想は、幼少年時代のコーリャに関する唯一の証言である。ここから明らかなように、コーリャの関心はきわめて広い。文学や東洋語から物理まで。ダンスが好きで、朗読がうまく、旅行が好きで、写真に夢中になり、鳩を飼い、永久機関の発明に頭をひねる。多彩な才能があった。



ギムナジウム時代のネフスキー

8 ネフスキーの進路

ギムナジウムを卒業する時がきた。ネフスキーは銀メダルを授与された。マリヤは、ネフスキーの成績について次のように言っている。

ギムナジウムを卒業する時には銀メダルしかもらえなかった。彼も私たちもみんながっかりした。管区から二つのメダル—金と銀がきた。ワーニャとコーリヤのどちらにどのメダルを渡していいのかわからなかった。二人とも金メダルをもらう値打ちがあった。くじを引かなければならなかった。すべての闇魔帳を見直し、2年生のときにドイツ語が4ですらく、3であることがわかった⁽⁵³⁾。

マリアの期待に反して、金メダルを授与されたのは、ワーニャ・モジュヒンだった。学生名簿によると、彼は1903年に入学し、1889年4月6日生まれの子である。しかし、歴史、ロシア語と教会スラヴ文学、ラテン語が4であれば、銀メダルが妥当な気がする。マリアの回想ではコーリヤは文学、歴史、地理の関心をもっていたので、当然歴史ができる感じがうけるが、予科、1年、2年、3年、8年、すべて評価は4であった。ネフスキーの才能や関心とギムナジウムの成績評価がストレートには結びついていないようである。

では、どの方面の成績がよかったのだろう。ネフスキーの成績表が残っている。それを紹介しよう。

中等教育修了証書⁽⁵⁴⁾

正教徒で、1892年2月18日ヤロスラヴリに誕生した尉官の子息ニコライ・アレクサンドロヴィチ・ネフスキーは1900年8月15日にルイビンスク・ギムナジウムに入学し、1909年6月3日まで品行方正に勉学に励み、8年間の全課程を終了、以下の成績をおさめたことに対し本状を授与する。

ギムナジウムの科目	国民教育省のギムナジウム試験規則74条に基づく教育委員会の評価
キリスト教要理	優 /5/
ロシア語と教会スラヴ文学	良 /4/
哲学入門	優 /5/
ラテン語	良 /4/
法律学	優 /5/
数学	優 /5/
物理学	優 /5/
数理地理学	優 /5/
歴史	良 /4/
地理学	優 /5/
ドイツ語	優 /5/
フランス語	優 /5/

品行方正と勤勉、成績優秀により教育委員会は修了証書を授与し、銀メダルで表彰する。1871年7月30日のギムナジウムとプロギムナジウムの規則129-132条が定めるあらゆる権利を提供するものとする。

ロシア語と教会スラヴ文学、ラテン語、歴史が4の評価になっている。それに比べ、数学や物理学、数理地理学は5である。一見すると、理科系の才能のほうが勝っている感じをうける。親戚やギムナジウムの校長が工科大学への進学を勧めたのも当然だった。迷ったネフスキーはペテルブルグ大学東洋学部とペテルブルグ工科大学の両方に願書を提出する。いずれからも入学が許可された。ネフスキーは大いに迷う。

結局、ネフスキーは周囲の熱心な助言に従って工科大学に入学することになる。なるほど、彼は自らの意思で東洋学部へ願書を提出した。東洋学への芽生えは、すでにあった。しかし、周囲の反対を押し切ってでも東洋学を選択しようという強固な決意がみなぎってくるのは、1年後、ペテルブルグにおいてであった。

終わりに

ネフスキーの幼少年時代を探ってきたが、東洋学への道はストレートではなかった。コーリャが自分の使命をはっきりと自覚するには、才能や関心以外に、一定の心の準備、世界における東洋や日本の役割に対する認識が必要だった。東洋学、日本学がネフスキーにとりのつびきならないものとなるには、やはりペテルブルグでの日々が必要だった。ペテルブルグのネフスキーを検討する必要があるが、紙数がつきた。稿を改めねばならない。幼・少年時代のネフスキーの写真はすべてエレナ・ニコラエヴナ・ネフスカヤの提供による。

注

- (1) См.: Ярославль. Карты городов России. М., 1998.
- (2) См.: Волга. От Ярославля до Углича. Рыбинск, 1999.
- (3) См.: География России. Энциклопедический словарь. М., 1998.
- (4) См.: Волга. От Ярославля до Углича. Рыбинск, 1999.
- (5) Государственный архив Ярославской области (далее -ГАЯО). ф. 642. оп. 3. д. 1314.
- (6) ГАЯО. ф. 230. оп. 10. д. 72.
- (7) ГАЯО. ф. 230. оп. 11. д. 94 об. -95.
- (8) Центральный исторический государственный архив С. -Петербурга (далее- ЦГИА С. -Петербурга). ф. 14. оп. 3. д. 57397. л. 21. об.
- (9) Там же.
- (10) ГАЯО. ф. 642. оп. 3. д. 1314.
- (11) ГАЯО. ф. 419. оп. 1. д. 101. л. 82-83.
- (12) ЦГИА С. -Петербурга. ф. 14. оп. 3. д. 57397. л. 22. об.
- (13) ГАЯО. ф. 230. оп. 11. д. 5. л. 446. об. -447.
- (14) ГАЯО. ф. 230. оп. 11. д. 330. л. 168 об.
- (15) ЦГИА С. -Петербурга. ф. 14. оп. 3. д. 57397. л. 23. об.
- (16) ГАЯО. ф. 230. оп. 11. д. 330. л. 165 об. -166.
- (17) ЦГИА С. -Петербурга. ф. 14. оп. 3. д. 57397. л. 22.
- (18) Петербургское Отделение Архива Академии Наук Российской Федерации. ф. 152. оп. 3. ед. хр. 426. л. 38.
- (19) Рыбинский филиал государственного архива Ярославской области. ф. 182. оп. 1. д. 392. л. 6 об.
- (20) Л. Л. Громковская, Е. И. Кычанов. Николай Александрович Невский. М., 1978. С. 9.
- (21) ЦГИА С. -Петербурга. ф. 14. оп. 3. д. 57397. л. 22.
- (22) Л. Л. Громковская, Е. И. Кычанов. Указ. кн. С. 9.
- (23) См.: Рыбинск. М., 1998.
- (24) См.: География России. Энциклопедический словарь. М., 1998.

- (25) Рыбинск. М., 1998. С. 109.
- (26) Там же. С. 120.
- (27) ГАЯО. ф. 642. оп. 3. д. 1016.
- (28) Рыбинский филиал Государственного архива Ярославской области. ф. 182. оп. 1. д. 194. л. 271об.-272.
- (29) Рыбинский филиал Государственного архива Ярославской области. ф. 262. оп. 1. д. 208. л. 179об.-180.
- (30) Рыбинский филиал Государственного архива Ярославской области. ф. 182. оп. 1. д. 392. л. 5 об.
- (31) Рыбинский филиал Государственного архива Ярославской области. ф. 262. оп. 1. д. 208. л. 179об.-180.
- (32) Рыбинский филиал Государственного архива Ярославской области. ф. 182. оп. 1. д. 392. л. 5 об.
- (33) Рыбинский филиал Государственного архива Ярославской области. ф. 182. оп. 1. д. 392. л. 6 об.
- (34) Рыбинский филиал Государственного архива Ярославской области. ф. 182. оп. 1. д. 414. л. 7.
- (35) ЦИГА С. -Петербурга. ф. 14. оп. 3. д. 57397. л. 2а.
- (36) Рыбинский филиал государственного архива Ярославской области. ф. 262. оп. 1. д. 208. л. 179 об.-180.
- (37) Не предать забвению. Книга памяти жертв политических репрессий, связанных судьбами с ярославской областью. Т. 4. Ярославль, 1997. С. 413-414.
- (38) Цит. по: Рыбинск. С. 186
- (39) Правьте на звезды. Рыбинский край в отечественной науке XIX-XX веков. Рыбинск, 1999. С. 71.
- (40) См.: Старый Рыбинск. История города в описаниях современников XIX-XX веков. Рыбинск, 1993.
- (41) Л. Л. Громковская, Е. И. Кычанов. Указ. кн. С. 10.
- (42) Там же.
- (43) Н. И. Конрад. Когда и как я стал востоковедом?///Народы Азии и Африки. 1967. №5. С. 238.
- (44) Л. Л. Громковская, Е. И. Кычанов. Указ. кн. С. 14.
- (45) Рыбинск 7 дней. 1998. №10.
- (46) Л. Л. Громковская, Е. И. Кычанов. Указ. кн. С. 16.
- (47) Там же. С. 10.
- (48) Там же. С. 11.
- (49) Там же.
- (50) Там же.
- (51) Там же. С11-12.
- (52) Л. Л. Громковская, Е. И. Кычанов. Указ. кн. С. 16.
- (53) Там же. С. 10.
- (54) ЦИГА С. -Петербурга. ф. 14. оп. 3. д. 57397. л. 2а.

(2002. 1. 30受理)